

サンプル

ピンク色のワンピース。肩まで伸びた髪。皐月は赤いランドセルを背負って走っている。それはまだ身体の小さな皐月にはひどく大きい。足の動きに合わせてゆさゆさと揺れてしまっている。ナスカンからぶら下がる巾着袋には三年一組近藤皐月（こんどうさつき）と書かれていた。

（早く帰らないと）

今日は特売デーだ。犬が入り口のポールによく繋がれている近所のスーパー。月曜日は牛乳と野菜が安い。

（終わるかな）

帰りには宿題もたくさん出た。

早くやらないと終わらなくなってしまふ。帰宅したら買い物、それからご飯の支度、掃除。朝干した洗濯物も取り込まなければ。それからお風呂掃除をして宿題。そして母親が使った食器を洗う。今日は給食がパンで腹持ちが悪い。少し多めに作ろう。母親が残せば残飯にありつけるかもしれない。

「ただいま」

家に入ると母親はソファに寝転んでテレビを観ていた。

近付くと無言で渡される手紙。牛乳一本。大根。砂糖。重いものばかりだ。これだから月曜日は憂鬱だ。

ランドセルを置いて、玄関に置かれたがま口を掴み走って外に出る。

今日は帰りの会で男子が怒られた。掃除の時間に箒と雑巾で野球をしたからだ。そのせいで帰りが遅くなったし、宿題も増えた。野球を止めなかったから、全員連帯責任だと先生は言った。皐月は困っていた。そのせいで家事が遅れてしまふ。そうすると叩かれるのだ。お腹やお尻、背中を。

仕方がない、近道しよう。本当はいつもの道を通りたいけど時間がないから。

その近道には前を通るだけでよく吠える大きな犬がいる。皐月がそーっと通っても、犬はピクリと起きてガウガウワンワンと吠えるのだ。それに墓地もある。だから嫌なのだけれど、それより母親に叩かれる方が怖い。

スーパーについたら急いでカゴをカートに乗せる。牛乳、大根、砂糖。メモを確認して売り場を回る。重たいけれど袋を二つに分ければ何とか持てるはずだ。

「お母さんかお父さんは？」

レジのおばさんが訊く。

「車で待ってるの」

使い慣れた嘘だ。

「あらあら、おばちゃん車まで運んであげましょうか」

「車までカートで運ぶから大丈夫です、ありがとうございます」

笑顔で言えば疑う者はいない。ここで一人で来たとバレ、お店の人が家に電話でもしようなら大変だ。母親の怒りが爆発してしまう。前に一度あったのだ。

皐月がもっと小さいとき、重いものを持ってふらふら帰るのを見て心配した女の人が一緒に家まで持ってくれた。それに気付いた母親は女性にはにこやかに御礼を言って、そして二人きりになった途端手を縛られて浴槽のお湯に頭を入れられた。苦しかった。あれはもう二度と体験したくない。それにきつと次そういうことが起きればもう命はない。

「気を付けてね」

皐月の言葉を信じたおばさんが笑顔で言う。それに頷き返して、急いで袋に詰めた。

帰り道、やはり犬は吠えた。行きは大丈夫だったのに。さつきはエサを食べているか、もしくは散歩に出ているのかもしれない。

いいな、と皐月は思う。うるさくしても怒られない。エサも貰える。散歩にも連れて行ってもらえる。確かに吠えられると怖いけれど、羨ましい。自分が犬だったらさつきと幸せだっただろう。外の景色を見てゆったりと過ごし、出されたエサを食べ、時折散歩に連れ出してもらおう。今みたいに学校に行って勉強をして、帰って家事と宿題をして、夜中に殴られる生活とどちらが幸せか。そんなこと考えるまでもない。

「ただいま」

母親はまだテレビを観ていた。振り向きもしない。荷物をキッチンに片付ける。手が痛い。ビニールの跡がついてしまっている。手を握り、開く。数回繰り返せば痺れるような痛みも楽になった。

次は何をするんだったか。洗濯か、ご飯作りか——早く思い出さないと母親が怒る。

早く、なんだっけ、早く——

「かはっ！は、は、」

バクバクとうるさい胸を押さえ身体を起こす。子供の頃の夢を見たのは久しぶりだ。忘れていた犬への憧れを思い出す。

犬。犬になりたい。

【ゲイ専用SM出会い掲示板】

携帯に表示されたレインボーカラーのリンクをタップする。条件検索。「ご主人様、ペット」けれど一つもヒットしなかった。仕方なく新規の書き込みページを開く。

【ご主人様募集。構ってくれる人、怒らない人、勃起できなくてもいい人、連絡ください。サツキ】

他の人の書き込みでは身長や体重も記入されている。けれどなんとなく個人情報を出すのが怖くてそれだけに留めた。

やはりきちんと年齢まで書くべきだったか。一時間経っても携帯は鳴らなかった。もしかしたらこういうのは見ている人が少ないのだろうか。そう思って投稿一覧を見るが、全国から数分置きに新規投稿されている。なら見ている人は多いけれど、皐月が好みに合致する人が少ないということだろう。

(あくあ……)

ベッドにどさりと横になる。やはり勃起できないというのが引っかかるのだろうか。それとも年齢や身体のサイズを書かなかったからだろうか。今からでも身長百六十八センチ、体重五十三キロ、年齢二十四歳と書き加えるべきか。

そう思いながら他の人の投稿を読んでいるとメールの受信を告げた。急いで開く。

【初めまして。サツキくんは寂しがり屋かな？俺はMな子が頑張っているところを見るのが好きなんだ。もしよかったらメールしませんか。S】

相手も身体のサイズや年齢は書いてこなかった。けれど頑張っているところを見るのが好き、というところに惹かれた。それに他には一通も来ていないのだし、と早速返信をする。

【Sさんへ。メールありがとうございます。多分寂しがりだと思えます。頑張っているところってどういうところで頑張っているのを見るのが好きなんですか】

送信。返信はすぐに来た。

【返信もらえて嬉しいよ。ありがとう。恥ずかしいことや辛いことに耐えているのを見るのが好きだよ】

寂しがりについての返事はなかった。別に広がる話題でもなかったしいいか、と思うことにする。

【Sさんはどういうことがしたいですか】

それからぼんぼんとやりとりは続いた。

【相手が本当に嫌なことは決してしない。どちらかと言うと相手が望むことをして甘えてもらうのが好きだな】

この人は本当にSなのだろうか。奉仕が好きなMのようにも取れる。そういえば最初のメールにSとあったけれどSMのSではなくイニシャルのSなのかもしれない。

【虐めるのは好きじゃないですか】

皐月のご主人様募集とだけ書いた。虐めてほしいという内容は書かなかったけれど、SM掲示板なのだから虐めたい人が見ているだろうと思ったのだ。

【サツキくんは虐められたいのかな】

正直に言うとうまく分からなかった。子供の頃——母親と暮らしていた頃、女の子の恰好をさせられていた。ずっと女として育てられていた。親戚に引き取られてからようやく男としての生活を手に入れたけれど、そのときはもうすでに性的嫌悪、勃起不全になってしまっていたのだ。以来、朝起ち以外の勃起はほとんど経験がない。オナニーは一度だけしたことがあるけれど、それだって結局射精したらその後勃起はしなくなった。

ならなぜ突然こんな書き込みをしたかと言えば、寂しかったからだ。SMのご主人様というよ

り、ペットと主人のような関係で構い、可愛がってほしかった。そういう意味では甘えてほしいと言っているこの人とはタイプが合うのかもしれない。

【虐められたいかどうかはよくわかりません】

【どういうご主人様が欲しい？】

【構って、可愛がってくれるご主人様です】

【お世話をされるのは嫌かな】

お世話。それはまるでペットに使う言葉のように感じる。

【どんなお世話ですか】

【食事を手づから食べさせるとか、排泄やお風呂のお世話だよ】

「あ……」

なんて魅力的なのだろう。そんな風にペットとして扱ってくれるのだろうか。

掲示板に書き込みをするとき、ペットと書くことは憚られた。皐月とてもう大人で、ペットを自分の所有物として扱う飼い主もいることを知っているからだ。物として扱われないんじゃない。愛玩ペットになりたいのだ。

【されてみたいです】

【今度会ってみないか。いきなりでは怖いかな】

会う——見ず知らずの人と。確かに怖い。年齢だって外見だって分からない。ああでもそれは相手にとっても同じはずだ。いや、でもやはり怖い。メールでは優しいふりをして、実際に会ったら強引だったり酷い加虐性を持っている人かもしれない。

返信に迷っているともう一通メールが届いた。

【突然だったな。すまない。もしよかったら電話しませんか】

そして表示された電話番号。携帯だ。声を聞いてみるのもいいかもしれない。話し方から何か分かるかも。登録はせず、恐る恐る番号を押した。

呼出し音が鳴る。けれど出ない。三回、四回、五回目で電話を切った。今メールしていたのだから席を外しているということもないだろう、そう思っているとすぐに携帯が鳴った。今の番号だった。驚きと恐怖で震える指で電話を押す。

『もしもし』

「あ……もしもし」

『出なくてすまない。通話料がかかってしまうかなと思ったんだ』

「あ……お気遣いすみません」

皐月の携帯は通話し放題なのだが、そうやって気遣ってくれるのが嬉しかった。優しい人だなと思った。それに声も話し方も穏やかだ。そんなに年もいっていないだろう。

『いや、驚かせたね』

電話の向こうで小さく笑っている気配がする。大人だ。落ち着いている。もしくはこういうのに慣れているのか。

「あの、僕掲示板とか初めてで……」

『俺もそうだよ。でも好みの子に繋がるとは思ってたなかった』

「え……」

もう好みの子、なんて言われるのか。チャライ人かもしれない。遊び慣れてる。

『ああいうところでは被虐性の強い子が多い。そういう子も好きなんだが、甘えたで寂しがりな子の方が好きなんだ』

「そうなんですか……」

『ああ、すまない、俺は折坂（おりさか）と言う』

『折坂さん……僕は皐月です』

『皐月くんか』

「はい」

『俺は怖いかな』

「え？」

『電話でも声の様子で少し分かるだろう』

「あ……怖くないです」

むしろとても優しそうだ。外見は分からないけれど、もし太ったおじさんでもこの話し方の人ならいいかもしれない。安心する声。

『そうか。それは良かった。皐月くんはどうして掲示板に？』

「その、寂しくて、構ってくれる人が欲しかったんです」

『ご主人様だろう？どんなご主人様がいいのかな』

「ペットみたいに可愛がってくれるご主人様です……」

恥ずかしい。なのに今知り合ったばかりで顔も知らないからか恥ずかしいとも言えてしまう。でもこの人なら、と思えたのだ。

『そうか。きちんと説明できて偉いな。ペットのようになんてお世話して、躰もしてやりたいな』

「躰……？」

『。ペットはただ世話をされているだけじゃないだろう？排泄の練習や、犬なら待てなどのコマンドも覚えてないといけない』

「あ……」

犬。先ほど見た夢が頭に流れる。幼い頃に住んでいた家の近くの大きな犬。犬になりたいと思っていたあの頃。いや、思っているのは今も同じだ。

『そういうのは嫌かな。ただよしよされていたい？』

「あ……や……されてみたいです……」

『素直でいい子だ』

そのままの流れで会うことになってしまった。顔も知らない。なのに、会う。恥ずかしい。けれど折坂の声がとても優しく、なんとなくこの人なら大丈夫と思ってしまったのだ。

会うのは明日、土曜日。皐月の住む駅の近くまで来てくれるらしい。着て行く服の特徴まで教えてくれた。黒いスラックス、白いシャツ。年は三十五だと言っていた。黒髪で軽いウェーブが

かかっている。

そう聞いて皐月も自分の特徴を伝えようとしたけれど、いらないよ、と断られてしまった。待ち合わせの場所に立っておくから、好みじゃなければ立ち去りなさいと。三十分待つて来なければメールアドレスも電話番号も消すから安心していいよ、と。

なんて紳士的なのだろうと思った。折坂にも外見の好みくらいあるだろうに、相手に委ねるなんて。そこまで気を遣える人なんだ、と思うと会うのが楽しみになった。

その夜は緊張して一睡もできなかった。

翌日。

待ち合わせは午前十時。

でもきつと、昨日話した折坂の様子だと早く来ていそうな気がして早めに家を出る。

もう外見はどんなでも構わないと思っていた。だってとても優しかったから。大事にしてくれそうな気がしたから。

結局電話を切った後、掲示板を見たと言う何人かからメールが届いたけれど、

【俺のデカマラでイラマチオさせて】

【奴隷として人権なしの躰】

【露出調教】

などと皐月の心を無視したメールばかりだった。やはりそういう人は多いのだろう。ペットになりたいなんて書かなくて良かった。こういう人が主人になりたいなんて言ったら大変なことになる。けれど折坂は違った。とても紳士的だったのだ。

待ち合わせの駅に着く。時計の下と言っていた。そういえばこの駅に大きな時計があることを知っていたのだからもしかしたら折坂も近くに住んでいるのかもしれない。遠くから来てくれていたら申し訳ないから、もしそうだったらいいなと思いつつ少し離れた所から時計を見る。

いた。教えられた特徴と合致する人。けれど女の人が横にいる。似ている人なのかもしれない。

しばらく様子を見てみよう、と遠くから観察を続ける。幸い待ち合わせの時間にはまだ時間があ。早めに来てよかった。

数分後、その男に話しかけていた女性がふらりといなくなった。男は腕時計を確認している。右手にしている腕時計。左利きなのか。というか、さっきの女性は何だったのだろう。飲み物でも買いに行ったのだろうか。しばらく見ていても戻ってくる気配はなかった。男は何度も時計を見ていた。待ち合わせだ、とすぐに分かった。けれどイライラしている様子も、周りをきよろきよろする様子もない。

ああ、あの人だ。あの人折坂だ。イライラした様子がないのは電話の通り穏やかな人だからだろう。そしてきよろきよろしないのは、きつと皐月が早めに来て様子を窺っていると分かっているからだ。だから敢えて、皐月が折坂の目につかないようにしているのだ。観察していることを見てしまわないようにしてくれている。

やはりこの人なら大丈夫、と思った。ゆっくりと近付いてみる。

驚いた、すごくカッコよかったのだ。きつとさっきの女性はナンパしていたのだろう。

「……あの、折坂さん……？」

「臯月くん？」

電話とは少しだけ違う声。生の声だ。電話でも優しくくて好きな声だったけれど、肉声はもっと優しい声だった。とても好きな声。安心できる声。話し方。そして目も優しくかった。濁りのない綺麗な瞳。

「はい。初めまして」

「初めまして。来てくれてありがとう」

こんなカッコいい人でも掲示板なんて使うのか。何か裏があるのだろうか。美人局の男バージョンとか。けれどその声や優しい微笑みに裏は感じられなかった。

「車で来ているんだが、怖いかな」

「……いえ」

でも、いいのだろうか。車種やナンバーを知られてしまっても。でもそう訊くのは悪用を考えていると思われてしまいそうで憚られた。案内されるがままに駅の駐車場に着く。

「これだよ」

高級車だった。白のセダン。ピカピカ。汚れも傷もなし。助手席のドアを開けてくれる。優しい。革のシート。車内は爽やかなフレグランスの香りがした。

「近くのホテルでいいかな」

「はい……」

「緊張してる？」

「はい……」

「俺もしてる」

そう言っ折坂が少し笑った。和ませようとしてくれているのだとすぐに分かった。気遣いのできる優しい人だなと思う。

車内に音楽はなかった。高級車だけあってエンジン音もほとんどない。静かな空間。それが緊張感を煽った。

「俺だって、すぐに分かった？」

「あ、はい、けど女の人と話してたから違うかもって様子を見てました」

「ああ、あれか。話しかけられてね」

「ナンパ、ですよね」

「どうかかな、こんなおじさんだから」

「おじさんじゃないです」

「ありがとう」

また小さく笑った。きっと大人だから声を上げて笑うようなことはないのだろう。けれどそこにまた魅力を感じてしまった。

「ここでもいいかな」

車が入ったのはシティホテルだった。ラブホテルかと思っていたので驚く。こんなところ、一

度も入ったことがない。服装を確認する。Tシャツにチノパン。汚くはないし、まあ大丈夫だろう。

「え、と、はい」

「宿泊で取っているが、気にしなくていい。怖かったらこのまま送るよ」

「いえ……大丈夫です」

取っている、と折坂は言った。来るかどうか、好みかどうか分からない相手の為に予約をしておいたというのか。それも安いラブホテルではなくシティホテルを。

折坂は慣れた様子でエントランス前に車を停める。すぐにホテルマンが助手席のドアを開けてくれた。おずおずと車から降りる。こんなことされたことがなくて緊張してしまう。折坂をちらりと見ると慣れた様子でキーを手渡していた。

「おいで」

こちらの不慣れに気付いているのだろう。さりげなくエスコートしてくれる。恥ずかしい。けれど任せてしまおう、と思った。それ以外に選択肢はなかったのだけれど。

部屋への案内を折坂は断っていた。きつと皐月の緊張を慮つてのことだろう。廊下を一步步くごとにドキドキが高まっていく。

「どうぞ」

やはり皐月を先に部屋に入れてくれた。広いツイン。壁際にはミニバーまでついている。

「飲み物でも飲もうか」

「はい」

任せっぱなしだし、自分も動いた方がいいよな、とミニバーに向かう。小さな冷蔵庫を開けるとジュースも入っていた。その上にはワインクーラー。すごい。でも料金が分からなくて怖い。きつと飲めば別料金がかかるのだろう。

「俺がするよ。いきなりアルコールは怖いだろう？ジュースにしようか。お茶がいいかな」

「あ……えと、オレンジジュース……」

「オレンジジュース？可愛いな。ああ、あったよ」

ペットボトルを開けて、グラスにまで注いでくれる。けれど折坂はペリエをペットボトルのまま仰いだ。

「折坂さんは普段お酒飲みますか」

「ああ、好きだよ。毎日飲む。って言っても仕事が忙しくて酔う程は飲めないんだが」

「あの、僕に気を遣わず飲んでくださいね」

「俺が飲んでしまう方が怖いんじゃないか？俺は酔うまで飲むことはないが、豹変する男もいるから安易に酒を勧めてはいけないよ」

注意されてしまった。しかもこちらを思いやっつての。なんて気遣いのできる人なのだろう。優しい。

「オレンジジュースが好きなのか」

「えと、子供っぽいですよ、ごめんなさい」

「いや、可愛いよ。オレンジジュースが好きだと覚えておく」

「あ……」

次がある、と思ってもいいのだろうか。まだプレイは始まっていないから折坂とこれからどうなるかなんてわからないのに、また次があると折坂が思ってくれているらしいだけで嬉しくなってしまう。

「照れてる顔も可愛いな」

「や……」

思わず下を向く。だってそんなこと今まで一度だって言われたことがない。

「少し話をしようか」

そう言われ、ミニバーからソファに移った。一人分の間が空く。その距離にまた優しさを感じた。

「怒らない人って書いていたな」

「はい……その、叱られるのはいいんですけど……」

「ああ、そういうことか。SMではお仕置きをされるのが好きな人もいるから珍しいなと思ったんだ」

「ごめんなさい、好みじゃないですか」

「そんなことないよ。怒られるのは誰だって怖いだろう。それに叱られるのは平気なんだろう」

「えと、多分……」

「叱られないいいこにはなれそうかな」

「あ……」

プレイが始まったのだろうか。いいこになれるか、という質問にさえドキドキしてしまう。いけない世界について足を踏み入れたのだと気付く。

「……怖いかな」

「……少し」

「うん、そうだな。初めて会うんだから怖いよな。……俺に嫌悪感はあるかな」

「え、ないです、全然」

それは全くと言っていいほどなかった。むしろ好みだと思っている。

「そうかよかった。外見の好みもあるからとって」

「あの、折坂さんは、僕でも大丈夫ですか」

「大丈夫どころかとても好みだよ。まさか掲示板でこんなに可愛い子に会えるとは思ってなかった」

綺麗な二重だな、と折坂は言った。折坂だって切れ長の二重でとてもかっこいいのに。

「それに綺麗な髪だ。染めてるのか」

「いえ、地毛なんです」

「ミックスか？」

「……いえ……多分違うと思うんですけど」

折坂は追及してこなかった。よかった、と安堵する。だって訊かれたって皐月自身親の出自など知らないのだ。しかも父親に至ってはどんな人間かすら知らない。

話題を変えないと、と折坂の話に戻す。

「あの、僕も折坂さんみたいなカッコいい人が掲示板を使ってるなんて……その」

「ああ、俺はアメリカ生活が長くて日本にきたばかりなんだ。だから知り合いも何もなくてね」

「あ、そうだったんですか」

「そういう意味では俺も寂しがりなのかもしれないな。可愛いペットが欲しいと思ったんだ」

「あ……ペット……」

「そう。俺がいないと生きていけないペット」

「あ……」

ドキドキした。折坂がいないと生きていけないペット。自分がなりたいたと思った。けれど、もしかしら他にでもペットを抱えているかもしれない。だってこれほどのいい男なのだ。勝手に芽生えた独占欲。まだ何も始まっていなくて、本当に折坂の好みかどうか分からないのに身勝手だ。

「まだ意識しなくていい。けれど今日一緒に過ごして、これから俺のペットになれるか考えてくれたらいい」

「……はい」

そうしている間に折坂自身も皐月が自分好みのペットになれるか精査するのだろうか。はいと答えたものの、皐月はすでにどうしたら折坂好みのペットになれるかを考えている。

「そんなに硬くなることはないよ。大丈夫。ハグしてみてもいいかな」

「あ……はい……」

「怖い？」

「あの、初めてなんです」

「初めて？ハグが？」

「はい……」

「そうか。じゃあ今日は手を繋いだまま過ごそうか」

「え……でも……」

「怖いだろう。焦ることはないよ。徐々にでいい」

「……ハグ、してください」

これほど優しい人ならきつと大丈夫。騙されていたとしたら悲しいけれど、そうではない気がした。信じてみたい。

「……怖かったらきちんと言うんだよ」

「はい」

折坂の座る右側に上半身を捻るとぎゅっと腕の中に閉じ込められた。

「怖い？」

首を振る。ドキドキするだけだ。恐怖はない。

「可愛い……大丈夫、俺も緊張してるよ」

「うそ……」

「本当。ああ、皐月くんはとても可愛い。本当にこんなに可愛い子が来てくれるとは思ってなかったんだ」

「嬉しいです……」

本当に嬉しかった。自分でいいと受け入れてもらえたことが。そして可愛いと言ってくれたことが。

「頭を撫でても？」

「はい……」

折坂の手が優しく頭頂部から後頭部へ撫で下ろされる。優しい手付き。

「いいこ……ベッドへ行くのは怖い？」

「あ……」

「大丈夫。寝転がって抱きしめるだけだよ」

「はい……」

解かれた腕が寂しい。抱きしめられる温もりがなくなったのが寂しい。早くまた抱きしめてほしい。頭を撫でてほしい。

「おいで」

手を繋がれる。歩みはゆっくりだった。急かさないとところが優しい。

「怖くないよ。ハグしような」

先に折坂が寝ころんだ。そして皐月が来るのを待っていてくれている。

「折坂さん……」

腕の中に入る。またぎゅうと抱きしめてくれた。

「いいこ。ちゃんと来れた。ご褒美は何がいいかな」

「え……」

「怖かったんだろう。けれどちゃんと頑張った。頑張ったらご褒美だよ」

「……頭、撫でてほしい……」

「うん、いいこ。よしよししような」

また頭を撫でてもらう。緊張が少しずつ解れていく。すると少しずつ折坂を感じるようになってきた。体温、匂い。シャツの感触。

「あ……」

「このままゆっくり過ぎそうか」

さつきもそう言っていた。焦らなくていいと。けれどそれではホテル代も折坂の時間も無駄にさせてしまう。だってプレイの為に会ったはずなのだ。それに満足させられないと幻滅されるのも嫌だった。

「や……してほしいです……折坂さんのしたいこと」

「……怖いだろう？」

「大丈夫……折坂さんなら……」

「男をそんなに簡単に信用してはいけないよ」

「また注意されてしまった。けれど本当に危ない人ならそんなことは言わないはずだ。」

「してください……」

「……じゃあまずは一緒にシャワーを浴びようか」

「あ……」

シャワー。生々しい。セックスの準備、ということだ。

「怖いだろうか？」

「……平気です」

「強がらなくていいよ」

「や……折坂さんに幻滅されたくない……」

いやいや、と首を振る。質の良いシャツが額を擦る。

「幻滅？どうしてそんなことを考えるんだ。そんなことないよ。大丈夫」

「やです……満足……はしてもらえないか分からないけど……でも……」

「皐月くんは寂しがりで不安がりかな？大丈夫だよ」

「や……」

「わかった、じゃあシャワーに行こう」

初対面なのに我儘を言ってしまった。困らせてしまったかもしれない。けれど折坂だってこのために来ているはずなのだから困ることはないだろう。きつと折坂にとってはいい流れのはずだ。

「恥ずかしい……」

いざ服を脱ぐ、となれば羞恥心に襲われた。自分から言ったくせに、面倒臭い奴だと思われてしまう。けれど恥ずかしくて堪らなかった。だって人に身体を見られたことなんて大人になつてから一度もないのだ。

「これから裸より恥ずかしい姿を見られるんだよ」

「あ……」

「可愛い。初めてだし、一人で浴びて来ても構わないよ」

どうしよう、と思う。きつと折坂なら一人を選択しても怒ったりはしないだろう。けれど折坂

はお世話をしたいと言っていた。だから――

「あの、お風呂のお世話、してくれませんか……」

「勇気を振り絞って言うよと折坂は一瞬の瞠目の後に破顔した。」

「うん、するよ。服も脱がせてあげるし身体も綺麗に洗ってあげる。身体も拭くし、着替えもさせてあげるよ。ペットは自分では何もできないから」

「あ……ペット……」

「。ペットとして可愛がられたいんだろう？」

「はい……。ペット、になりたい……」

「いいこ。けれどペットは恥ずかしがったりしないよ」

~~~~~

水で萎えさせられるなんて恥ずかしい。でもこれもお世話なのだ。羨なのだ。待ての練習。だって皀月はペットだから。

「ひゃっ!!」

シャワーの水がペニスに当たる。その冷たさにそれは一瞬で力を失った。

「ああ、冷たかったな。ほら、大丈夫、もう萎えたよ。ちゃんと我慢できて偉かったな」

折坂はすぐにソープを泡立て、ペニスを泡で包んでくれた。

「あ……ん……」

「気持ちいいかな」

「はい……ペニス、気持ちいい……」

「ペニス？皀月くんには似合わないな。おちんちんと言いなさい」

「あ……」

「皮も剥けなくて、小さくて、使われたことがないんだ。ペニスっていう感じじゃないだろう？」

「あ……おちんちん……？」

「そうだよ。皀月くんのはまだ可愛いおちんちんだ」

「はい……おちんちん、洗ってもらって気持ちいいです……」

「いいこだ。じゃあ皮を剥くよ。勃起してなければ剥けるだろう？」

「はい……けど、その……普段から剥いて洗ってるんですけど、いつもちよっと痛くて……」

「そうか……ちよっとだけ耐えてくれ」

折坂は泡を増やしてゆっくりと皮を剥いてくれた。恥ずかしい。この年になって人におちんちんの皮を剥いてもらって洗われるなんて。

「痛いかな」

「少し……」

「すまない、もう少しで剥けるから」

折坂が悪いわけではないのに。どこまでも優しいな、と嬉しくなる。

「洗うよ。敏感だろう。大丈夫か」

「はい……おちんちん綺麗にしてください」

「……きちんとご挨拶ができて本当にいいこだ。しっかり綺麗にしような」

折坂の手が剥き出しになった亀頭を包む。くる、と撫でるように洗われる。

ビクッ

「あっ!!」

「ああ、感じすぎて痛いかな？ほら、カリを洗うよ」

括れの部分は親指で擦るように洗われた。むくむくとおちんちんが勃起する。けれど皮が締ま

って痛くなってしまう。

「いたいっ、おちんちん痛いッ！」

「ああ、すぐに冷やそうな」

折坂はすぐに冷水を掛けてくれた。冷たくて辛いけれど、皮の引き伸ばされる痛みが和らいでいく。

「あ……」

「大丈夫か」

「はい……ありがとうございます」

「礼はいい。ペットの世話は主人の役目だ。お湯に浸かっていなさい」

全身を撫でるようにシャワーで洗い流してもらってお湯に浸かる。温度は低めだ。これなら長く浸かっていても逆上せることはないだろう。

折坂は身体を清めている。遅い身体だ。この身体に今から抱かれるのだろうか。そう思うとまたおちんちんが硬くなってくる。幸いなのは折坂がしっかりと皮を戻してくれたことだ。皮を被っているときなら勃起をしても痛くはない。

しかし冷やしてもらったばかりなのにまた勃起しているなんて知られたら呆れられてしまう気がする、気を逸らすべく視線を窓に投げた。まだ午前中だ。外は明るい。下を覗き込むようにすれば買い物や仕事で歩いている人たちが見える。みんな健全に外を歩いている。自分は今のいやらしい出来事に勃起するそれを隠そうとしているのに。

「皐月くん」

「あ、はい」

「何か面白いものでも見えたか？」

折坂が浴槽に入ってくる。広いので十分入れるのだけれど、少し詰めて場所を空けた。

「いえ、みんな外歩いているのに……」

「皐月くんはいやらしい気持ちになってる？」

見透かされていることに羞恥を覚え俯く。なんて敏いのだろう。

「可愛い。こちらを見なさい」

「あ……」

優しい命令口調。逆らえない。従いたくなってしまう。

「いいこだ。おいで。抱っこをしよう」

「あ……けど、裸……」

「うん、恥ずかしいな。けれど皐月くんは恥ずかしいと気持ち良くなるんじゃないか」

「や……」

きつぱりと否定できたらいいのに。それが出来ず視線をまた窓に向けた。

「こちら。主人の言うことが聞けないペットかな」

「あ……ごめんなさい……」

「いいよ。大丈夫。怒ってない。こっちに來れるかな」

「ん……」

膝立ちで近寄る。手を伸ばせば引き寄せてくれた。胡坐の上に、胴を跨ぐようにして乗せてもらう。微かにおちんちん同士が触れる感覚が恥ずかしい。

「いいこ。臯月くんは犬かな」

「犬？」

「そう。恥ずかしがりだけど甘えたがりで、従順」

「あ……従順……？」

「うん、ちゃんということを聞けてるだろう」

「聞けてますか」

「うん、とてもいいこだよ」

「嬉しい……」

「辛いのに、ちゃんとおちんちんも射精を待てできただろう」

「はい……あの……」

「うん？」

「何でも言っつていいよ、とその目が言っつている。」

「ご主人様が治してくれたのに、また……」

「また？」

「……おちんちん、勃起してしまいました……」

「そうか。臯月くんはえっちなな。でも久しぶりの勃起なんだろう？大丈夫、きつとたくさん溜まっつているだけだ。後で楽にしてやろうな」

「はい」

「外を人が歩いてるのを見て勃起したのか？」

「どうしよう、と思っつた。正直に言っつていいのだろうか。折坂の筋肉に勃起しましたなんて……」

折坂は引かないだろうか。

「臯月くん、言いなさい」

やはり言葉は命令調なのに言い方はとても優しい。

「……ご主人様の筋肉を見て……この身体に抱かれるのこなつて思っつたら……」

「そしたら？」

「勃起してしまいました」

「そうか。ちゃんと言えたな。けれどセックスはどうかな」

「え……？」

「臯月くんが欲しいのはペットとしてのご主人様だろう？犬は主人とセックスするかな」

「あ……」

そうだ。確かに折坂の言う通りだ。恥ずかしい。ただのペットなのに抱いてもらえるなんて勘違いをして。

「臯月くん、臯月くんは誰かに抱かれた経験は？」

「ないです」

「抱いた経験は？」

「ないです……」

「まるつきり初めてなんだろう」

「はい……」

「ずっと未経験でいるのもいいと思わないか」

「え……？」

「ずっと未経験。ずっと童貞で、ずっと処女と言うことだろうか。」

「気持ちいいことをたくさん知っていて、それをしてくれる人もいるのに、ずっと入れたり入れずもらえたりはしない。ずっともやもやして、物足りないまま犬として生きていきたくないか」

「や……そんな……」

「抱かれない？」

「……はい……」

「俺に？」

「はい、ご主人様に……」

「じゃあ、俺の理想のペットになれたらそのときは抱こう」

「理想のペット……」

「そう、理想のペット」

「どんなペットですか」

「どうしたら抱いてもらえるのだろうか。会ったばかりだというのにそう思ってしまう自分はいやらしいのだろうか。こんなに抱いてほしくてたまらないなんて。性的嫌悪で悩んできたなんて嘘みたいだ。けれど、皐月がとてもはしたないことを言っているのに、折坂は少しも蔑んだりしない。どころか濡れた髪を優しく梳いてくれる。」

「言わないよ。ペットは普通言葉が分からないだろう。主人が何を求めているのか感じ取って動きなさい」

「そんな……」

「何も分からないのに。SMの世界のことも、主人とペットプレイのことも、セックスのことも、そして折坂のことも。なのに自分で考えて動かないといけないなんて。そしてそれが正解でなければ抱いてもらえないなんて。」

「それとも、そんな面倒臭いかな。他に今すぐ抱いてくれる人を探す？」

~~~~~

「そうか、皐月くんはおちんちんより乳首が好きなんだな」

「あつ、すきつ、すきつ」

「ッ……」

折坂が息を呑む気配がした。何か変なことでも言ってしまっただろうか。

「あっ？ごしゅ、ごしゅじんさまっ？」

「いや、可愛くて」

言葉と共にぐり、と腰に勃起を押し付けられる。

「あっ……おっきい……」

「皐月くんより大人というだけだよ」

「ああっ！」

ぐりぐりと勃起が当たる。腰骨が痛いくらい。なのに気持ちがいい。

「あっ、もおっ、もおイきたっ……」

「でもおちんちんはいららないだろう」

「あっ……や、やだ、両方の乳首っ、おちんちんもっ」

「俺の手は二本しかないよ」

そう言っ折坂は笑う。

分かってる。けれど全部欲しい。

「皐月くんがおちんちん触ったらいいんじゃないか」

「やあっ」

「どうして？」

「だってっ、自分じゃイケなっ」

あんなに射精の練習をしたのに、一週間一度も射精には至れなかったのだ。自分で触って射精できるとは思えなかった。

「大丈夫、ちゃんと射精できるよ。ほら、触ってごらん。乳首は弄ってあげるから」

「ああっ、イけるっ？僕っ」

「うん、イけるよ。大丈夫。ここからおちんちん見ていてあげる」

おずおずと手を伸ばす。折坂の顔は皐月の肩の上にある。折坂の身長が高いせいで、おちんちんはしっかりと見られてしまう。

「おちんちんの皮はどうしようか」

「……このまま……」

「包茎のまま、皮の中に射精する？」

「ああああ！」

乳頭の先端、平らなところを触れるか触れないかのタッチでくると円を描くように弄られる。これがたまたまなく気持ちいい。もしかしたら本当に乳首だけでイってしまうんじゃないかと思っほど。

「ほら、乳首に集中しないでおちんちんも触ってあげような」

「んっ……皮の中に射精してもいいですか」

「うん。まだおちんちんは恥ずかしいみたいだからそのまま射精してごらん」

射精できるかどうかはわからない。けれど折坂ができると言ったから、きっとできるのだろう。皮を被ったままの小さなおちんちんを握る。自分の手でも覆えてしまうほどそれは小さい。けれど折坂が可愛いと言うから、これでいい。

「あっ、ああっ」

「乳首引っ張ろうか」

こくこくと頷く。おちんちんより乳首の方が快感が強い。もっと強く弄ってほしい。おちんちんは精液の動きを促す程度でもいい気がしてきた。

「臯月くん、お手て。きちんと動かすんだよ」

「あっ、だつてっ」

「だつて？」

「乳首の方がきもちっ」

「そっか。じゃあおちんちんから手を離していいよ。おちんちんは可哀想だけど、そのままにしよう。ほら、乳首を弄ってあげる」

折坂はそのまま乳首を延々と弄り続けた。擦られ、抓まれ続けたそこはヒリヒリと痛みだす。

「……無理かな」

「ああっ？な、にっ」

「乳首でイけるかと思っただが、やっぱ無理そうだ」

「あっ、むりいっ」

「でもおちんちんより気持ちいいだろう。そのうちイけるようになるかもしれないよ」

「ああっ」

乳首でイくことを恥ずかしいとは思わなかった。むしろそれが身体的に可能なら、できるように躑けてほしかった。もっと、もしかしたらこのまま続けてもらえればイけるようになるんじゃないか、そんな気がするのに、折坂の手は乳首から離れた。

「じゃあ、身体洗う続きだよ」

折坂のペニスはまだ硬いままなのに、それを感じさせない穏やかな話し方。身体は興奮を示しているも心が興奮していないのだろうか。

頑張っつて、耐えている姿を見ないと射精できないと折坂は言っていた。今臯月はただ感じるだけで何も辛いことに堪えなかったからかもしれない。折坂の射精が見たいのに。今日こそ射精してほしいと思っっていたのに。いつか折坂が射精してしまうほどいやらしい顔をできるようになるだろうか。なりたい。辛いことでも耐えるから。ちゃんと耐えて、その先に快感を見つめるから。

「ご飯だよ」

折坂が皿を床に置く。四つん這いで近付いて、折坂を見上げる。

「いいこだ。よし、食べていいよ」

待てと言われたわけではなかった。けれど昨日観た動画の犬が、よしと言うまで食べなかった

のだ。だからそうしただけ。

皿の中にあっただのはマカロニグラタンだった。口の周りや鼻の頭まで汚れてしまう。けれどとても食べやすかった。時折隣の水の皿に舌を入れ、濡らす程度だけれど水を飲む。

「上手だ」

食べるだけで褒めてもらえるなんて、犬はなんて幸せなのだろう。幸せを噛みしめながら食事を続ける。けれど折坂は食べなくていいのだろうか。それとも皐月が食べ終えた後に一人、テーブルで食べるのだろうか。それは寂しい。今は折坂が目の前に居てくれるから寂しくないけれど、一緒にいるのに一人の食事というのはとても寂しいものなのだ。

「どうした？」

咀嚼が止まった理由を問われる。けれど今皐月は犬なのだ。そう思うと答える気にならず、そのまま皿に顔を突っ込んだ。

「お腹いっぱいになったかな。若いしおかわりかな」

それよりも折坂は食べないのだろうか。お腹が空いていないのだろうか。その方が気になった。じっと折坂を見上げる。

「うん？どうした」

「ご主人様も食べてください」

「ああ、気にしてくれていたのか。ありがとう」

折坂は皐月用の皿に追加を入れるとソファに座りテーブルに買ってきた弁当を置いた。

やはりルームサービスにしようかと折坂は買い物の際に言ったのだ。けれど二人の空間に第三者が介入するのが嫌で、コンビニでいいから買って帰りたいと皐月が言った。いかにも育ちの良さそうな男はもしかしたらそんなものは食べないのかもしれない、と言った後に思ったけれど折坂は嬉しそうに頷いたのだ。

「いただきます」

きちんと手を合わせての挨拶。そう言えば皐月は何も言わずに食べ始めてしまった。けれど注意はされなかった。気にしないタイプなのか——いや、きっと犬は挨拶をしないからだろう。それに「よし」を待てたからか。

「皐月くんも食べなさい」

時折交る様になった命令調。それはとても嬉しいけれど、そういえばいつになったら呼び捨てで呼んでもらえるのだろうか。じっと見上げる。

「どうした」

何でもない、と首を振って皿に口を入れる。ホワイトソースが冷めて硬くなり始めている。でも初めて貰ったエサだ。最後まで食べたい。

全て食べ終え、皿に残ったソースを舐め取る。鼻の頭が汚れて痒い。けれど犬は拭かない。だからそのままにした。

「いいこだ。綺麗に食べたな。これも食べるか」

そう言って皿に入れられたのは唐揚げ。一口では食べにくい大きさだった。かと言って本当の

犬のように口だけで噛み千切ることにはできない。おろおろしていると頭を撫でられた。

「大きかったな」

笑っている。分かっているやっただと気付く。

折坂は皐月の皿から唐揚げを箸で取り上げると、噛みついて二つに裂いた。そして箸の方を皿へ戻される。

この大きさなら食べられる。そう思ったけれど折坂が口に啜えたままの肉も気になった。ちらりと見る。折坂は食べようとしていない。まさか、いいのだろうか。

折坂の膝に手を乗せて上半身を伸ばすようにして口に顔を近付ける。止められなかったから、折坂の啜える肉をべろりと舐めた。そして少し身を引いて折坂の様子を窺う。折坂はそのまま動かない。もう一度顔を近付けた。そして肉を啜えてみる。

折坂は口を開いた。このまま食べていいことだろうか。啜えただけの肉を口に入れ咀嚼した。

これも口移しというものなのだろうか。折坂の啜えた肉。唾液のついた肉は美味しかった。飲み込むのがもったいなくて大事に何度も噛み砕く。

「いいこ」

折坂を見ると優しく微笑んでいた。きつと折坂の望む行動を取れたのだろう。それが嬉しくなる。皐月自身も嬉しくて、折坂も嬉しい。

「美味しい？」

咀嚼を続けながら頷く。濃いめの味付けのはずなのに、すぐに味がなくなってしまった。

「またしてあげるから飲み込みなさい」

少し呆れたように言われた。引かれたのだろうか。気持ち悪い奴だと思われたのだろうか。

折坂をちらりと見て、そして飲み込む。——終わってしまった。

「残りも食べなさい」

折坂はそう言って皿に残った肉の片割れを視線で指すと自身の食事に戻った。

寂しい。もつと構ってほしかった。食べさせてほしかった。けれど折坂も食事の時間だ。食べ終えたらきつと構ってもらえる。箸が触れただけの唐揚げはすぐに飲み込んだ。

水を飲む。そういえばおしっこもしたい。おしっこをすれば折坂はまたベットシートまで来てくれるはずだ。そしておちんちんからおしっこの残滓が垂れていないか確認してくれるはず。

舌を動かすとびちゃびちゃと皿から水音が立つ。ああ、自分は犬になったのだ、と今更実感し喜びが込み上げる。嬉しい。泣いていいと言ってもらえたし、エサも貰えた。トイレの躰もしてもらった。子供の頃に夢見た犬。まさにそれになった。

「馳走様」

折坂は食べるのが早い。昼食のときも思ったけれど、きつと多忙で早食いが身体に慣れてしまっているのだろう。

ゴミを袋にまとめた折坂が床に膝をつき、視線を合わせてくれる。嬉しくなって擦り寄ろうとするけれど苦笑しながら止められてしまった。

「顔を綺麗にしような」

そうだった、顔はホワイトソースまみれだ。目を瞑って顔を差し出すと、頬まで拭かれてしまった。そんなに汚してしまっていたのか。

「初めてなのに、とても上手に食べた。トイレは大丈夫かな」

~~~~~

気付いたらまた眠ってしまっていたらしい。目を開けずとも、まだ音で折坂が仕事をしているのだと分かる。折坂は在宅での仕事だというのに、とても規則正しい生活をする。軌道に乗っているからと言って昼食を抜くようなことはしない。きちんと時間を確認しながら仕事をしているのだ。

だから、今はまだ午前中だろう。昼食の時間になっていたら起こされたはずだ。

それにしても、少し寒い。

エアコンは皐月の体感に合わせて設定されている。折坂はしっかりと服を着ているけれど、皐月は全裸だからだ。けれどどうやら寝ている間に冷えてしまったらしい。でも言葉を発することはいたくないし、仕事の邪魔もしたくない。寒さをしのぐように身体を一層丸めると、折坂の声がした。

「寒いか」

ぎゅっと膝を抱き込んだまま折坂を見る。近付いてきた。そして身体に触れる。

「冷えてるな。すまない、寒かったな」

そう言っ折坂はリモコンを弄ると「ここで待っていなさい」と言い置いて部屋を出て行った。温度設定を変えてもらったことで寒さは和らいだ。けれど今度は強烈な尿意が襲った。

(おしっこ……)

どうしよう、と思うものの、折坂はここで待っていなさいと言った。つまり部屋から出ることはできない。もじもじと足をすり寄せる。出てしまえうさだ。

せめてと思いきツションから下りてドアの前に犬座りをして待つ。ドアは廊下に向かって開くタイプなのでここにいっても邪魔にはならないだろう。

(まだかな)

折坂はなかなか戻ってこない。尿意を我慢しているせいで時間が長く感じているのだろうか。ドアをどンドンと握り拳で叩いてみる。しかし折坂は戻ってこない。応答の声も聞こえない。(出ちやうっ……)

部屋から出て、リビングに行ってもいいだろうか。リビングはすぐそこだし、今ならまだベツトシートに間に合う。

でも、待っていなさいと言った。だからここで待たないといけない。

(ご主人様っ……あっ！)

ぎゅっと力を入れていたのに、しよろ、と少し漏れてしまった。急いでまた力を入れ直し我慢をする。

下を見る。やはり漏れてしまっていた。床に小さな水溜まりが出来ている。どうしよう、お漏らしをってしまった。折坂の大切な仕事場でおしっこを漏らしてしまった。

ガチャ――

「ん？どうした？」

目の前のドアが開き、折坂が見えた。手にはふわふわのブランケットを持っている。見たことのないものだ。もう少し寒くなってから使うものを奥から引っ張り出してくれたのかもしれない。

「皐月？」

ぼろぼろと涙が落ちた。

折坂は皐月のためにブランケットを取りに行ってくれたのに、皐月はお漏らしをってしまった。折坂の大切な部屋を汚してしまった。

「皐月の様子を怪訝そうに見た折坂は床に膝をついて視線を合わせてくれた。優しい。いつもそうだ。同じ目線で話してくれる。」

「皐月、どうし……ああ、おしっこが出たのか」

空いた手が皐月に伸びた。

(叩かれる！)

怖くて思わず首を竦める。けれどその手は皐月の頭を優しく撫でた。

(え……?)

「大丈夫、怒ってないよ。待ってなさいって俺が言ったから、ここで待っていたんだろう」  
言うことをちゃんと聞いていいこだな、そう言って優しく頭を撫でられる。

(ご主人様……)

「もう全部出たかな」

その問いかけに答えることはできなくて、少しだけ下腹部の力を緩めてしよろっと尿を出す。これ以上汚すなんて怒られるだろうかと思ったけれど、言葉を使わずに伝える方法が分からなかった。

「ああ、途中で我慢したのか。いいこだ。あと少しだけ待てるかな」

そう言って折坂は走って部屋を出て行った。

あと少し、我慢。きっと折坂はすぐに戻って来てくれる、そう思うともう少しだけ頑張ることができた。

「お待たせ。辛かったな。すまない」

そう言って足の間――水溜まりの上――に置かれたのは折坂のバスタオルだった。厚みがあつていかにも高級そうな、ふわふわのやつ。

「ほら、出していいよ」

でもそのタオルはいつも折坂が優しく皐月を拭いてくれるタオルだ。決して皮膚を擦ったりせず、ぼんぼんと優しく叩くように拭いてくれるのだ。そのふわふわのタオル。

お腹が痛い。尿道がツキンツキンと限界を訴えている。確かに尿の上ですでに置かれてしまったけれど、これ以上汚したくなかった。優しいふわふわのタオル。いやだ、と思うとまたぼろぼろと涙が零れる。どうして失敗してしまったんだろう。どうして我慢できなかったんだろう。

「臯月、大丈夫だよ。ほら、おちんちん痛くなってしまうよ、出してごらん」

そう言っておちんちんを持たれたタオルに乗せるようにされるともう我慢はできなかった。包茎の先端が尿で膨らみ、そしてシャーと勢いよく尿が飛び出していく。

「いいこ。ああ、たくさん溜まってたな。冷えたんだろう。気付かなくてすまなかった」

褒められながらの排尿はとても気持ち良かった。我慢していたから余計に気持ちいいのかもしれない。

「いいこ。上手」

排尿が終わると、あとは折坂がしてくれる。おちんちんを持ち、先端の残滓をタオルにあてて吸わせてくれる。これがとても心地いい。お世話をされていると強く実感できるのだ。

「上手に出せたな。おちんちんも膨らんで可愛かったよ」

そう言っ頭を撫でられた後、突然抱き上げられた。びっくりすると、折坂が笑う。

「手足も汚れてしまったかもしれないだろう。シャワーで綺麗にしような」

そう言っ、シャワーで身体を清めてくれる。皮も剥いて、中身まで綺麗に洗ってくれる。その手付きに勃起してしまっただけ、折坂は笑うだけで射精はさせてくれなかった。それが少し寂しかったけれど、身体を丁寧に拭かれた後にリビングのクッションで待つように言われて理由が分かった。

折坂がキッチンから大きな袋を持ってリビングのドアから廊下に消えたのだ。片付けをしてくれているのだ、と気付く。

排尿もシャワーもとても気持ち良くて、片付けのことなどすっかり忘れてしまっていた。これでは本当にただの犬だ。それもトイレで排泄もできない手間ばかりかけるダメな犬。

「しよぼん、としていると雑巾の片付けを終えた折坂が臯月の前に来た。」

「臯月、どうした」

「(主人様……)」

どうして怒らないのだろう。普通なら粗相をしたと折檻されるはずなのに。

「……臯月、そんな悲しい顔をしないでくれ」

自分は悲しい顔をしているのだろうか。確かにダメ犬だと自己嫌悪に陥ってはいるけれど。

「臯月は失敗したんじゃないよ、冷えて起きたんだから俺が想定すべきだった。辛い思いをさせてすまなかった」

~~~~~

「いいこだ。……臯月、ちょっと話があるんだが」

(なに……?)

怖い。何だろう。こんな風に改まって話をされたことは今まで一度もない。

「そろそろここへ来て半年だろう」

そうだ。確かにそろそろ半年が経つ。もうすっかり犬としての生活に慣れてしまった。

「そろそろ去勢の時期だよ」

「あ……」

つい声が出てしまい、慌てて口を閉じる。

「お話していいよ。大事なことからきちんと二人で話そう」

「……はい」

「去勢は怖いかな」

「……怖いです」

一体どうされるのだろうか。以前犬は睾丸を摘出すると言っていたけれど、臯月の性欲がなくなるのが嫌だと折坂は言っていた。

「前に言ったのを覚えているかな。犬は生後六か月で睾丸を摘出して性欲そのものをなくすんだ」
「はい……」

「けれど、せっかくこんなに可愛くてえつちな犬になれたのに、それでは寂しいだろう。それにホルモンバランスも崩れる。ホルモン剤を投与しないと骨粗鬆症にもなりやすくなる」

「やです、性欲……」

性欲がなくなってしまうなんて嫌だった。だって折坂に射精させてもらう時間も、射精のお片付けをもらう時間も大好きなのだ。射精して褒めてもらうのも、また発情してしまったのかって、少し困ったように笑う顔も。

「……なら、おちんちんを切ろうか」

「え……」

「俺の去勢の目的は性欲の減退じゃない。他の雌犬と交尾できないようにすることだよ」

「……しません」

「うん、そう思う。思っているけれど、その気持ちだけでは去勢とは言わないだろう」

「……だから、おちんちん？」

「そう。睾丸を取らなければ性欲も残るし、ホルモンバランスに影響もない。おちんちんで気持ち良くなることはできなくなってしまうけれど、臯月はもう乳首の方が好きだろう？」

「……はい」

まさか、このために乳首での射精を躡けたのだろうか。

「去勢まで出来たら、本当に犬だ。俺の理想の犬」

「あ……そしたら」

「うん？」

「そしたら、去勢が終わったら、抱いてくれますか」

「……ああ、そうだな。それに本当はもう臯月が可愛くて抱きたくて仕方がないんだ」

「本当ですか」

「うん。……でもおちんちんを残して睾丸をとってもセックスはできるよ。ただ、性欲が減退するから臯月がセックスをしたいと思わなくなるかもしれないが」

「や、やです、やだ、して欲しい……」

「うん。性欲がなくなるのは寂しいな」

「……おちんちんがいいです。おちんちん切る去勢にしてください」

「いいのか」

「はい。……その、僕にはおちんちんは必要ないので」

「だがもう立っておしっこすることはできなくなるよ」

そんなこと、なぜ言うのだろう。ここにきて半年、人間用のトイレだって一度も使っていないというのに。

「ペットシートだから……あ、それともおちんちんがなくなったらペットシートにおしっこすることもできなくなりますか」

今は犬座りで排泄をしている。けれどそれが出来ているのはおちんちんが下を向いているからだ。

「ペットシートの上で伏せをして排泄すれば問題はないよ」

良かった、そう思うもののそれだともう排尿は見てもらえないということだ。おしっこを上手に出せていて偉いと、排尿しながら頭を撫でてもらうことも。それは少し寂しい。

その気持ちを折坂は察してくれたらしい。

「……尿道の位置を変えようか」

「え？」

「尿道口を、タマとアナルの間に持つてくるんだ。そうすれば今までと同じように犬座りで排泄できる」

「本当ですか」

折坂は優しく頷いた。それなら嬉しい。またおしっこをしているところをちゃんと覗き込んでもらえる。

ああ、でも忘れていた。折坂はずっと処女で童貞のままていなさいと言っていた。おちんちん去勢をされれば一生童貞のままだけれど、折坂に抱いてもらえば処女ではなくなってしまう。臯月は折坂に抱いてほしくて仕方ないけれど、折坂の気持ちはどうなのだろう。

「……ご主人様」

「うん？」

「……僕は処女のままていなくてもいいんですか」

「……ああ、俺も抱きたい」

その間が気になった。信じてもいいのだろうか。

折坂のことを疑うわけではない。ただ折坂はとても優しいから、臯月に気を遣っているのではないかと不安になるのだ。もしそうなら……いや、それは術後に考えればいいことだ。手術してすぐにセックスができるわけではないし、今の折坂の望みは去勢なのだから。

二万文字あります。
長くてすみません……